

2012/06/24 礼拝メッセージ 岡田大輔 牧師

**主 題：ラメド：神のことばと確かな希望**

**聖書箇所：詩篇 119篇89-96節**

「いよいよこの時がやって来ました」と思っているのは私だけかもしれませんが、神はその不思議な主権の中であって、今日、こうして一つ、私の人生の1章を閉じることを良しとされています。こうして、私が愛するこの講壇から皆さんに向かって神のみことばを取り次ぐことができるのは、多分これが最後になるのではないかと思います。この12年間、私は何よりも神のみことばを皆さんにお伝えしたいと、そのことを心から願って来ました。神のみことばがもたらす、いや、みことばがもっている意味、その重要性、その必要性、そして、そこにある喜びを何とかして皆さんといっしょに学び、いっしょに考え、いっしょにそれを生きていきたいと心から願って来ました。私がいっさいそれをどれ程誠実に十分に成し遂げたのか、それは神がさばいてくださいます。心から願っていることは、これまでこの特別な場所で皆さんといっしょに為して来たそのみことばの働きというのが、神が喜んでくださるものであるということです。何よりも残念なのは、残念なことはたくさんあるのですが、その中の大きなものは、皆さんといっしょにこの詩篇119篇を最後まで見るできないということです。後10回ほど日曜日が必要なのですが、これも神が計画されていることの中で最善であると考えられて、ここで今日見るのが最後になるのだらうと思います。

#### ☆神のみことばにある希望の確かさ

先週、皆さんといっしょにこの詩篇を通して見て来たように、この詩篇の著者は非常に大きな困難の中にいました。その中で彼は問題の大きさのゆえに、自分自身ももっていたはずの希望を失ってしまい、それを手放してしまい、絶望の淵へと追いやられました。けれども、彼は決して神のみことばをこの手から離してはいけないと気付いたのです。それゆえに彼は、その最後の力を振り絞って、わずかにほんの小さな細い糸でしかないかもしれないそのみことばの希望にしがみついた訳です。私たちにも同じようなことが起こります。私たちも絶望の時を迎えることがあります。この中にいらっしゃる皆さんが、今まで一度も落胆を覚えたことがないというならそれは嘘です。私たちは必ず人生のいろんなところで希望を失いそうになります。いや、実際に失うことがあります。絶望の中に置かれてもうどうしようもないと思うことが何度もあります。

でも、先週も見たように、この詩篇の著者はその中であって私たちが持つことができる唯一の希望を指し示してくれたのです。今朝、私たちは89節から始まる第12番目の詩文節を見ていきます。そこでこの詩篇の著者は、自分の持っていた、しがみついていた小さな細い糸でしかなかった神のみことばという希望が、太い綱へと変わっていくのを体験して行きます。それが余りにも確かであるゆえに、それにしがみつけないことがばからしいことだと考えるほどになるのです。私たちは今日、その姿を見ていきます。彼はここで私たちに教えるのです。神のみことばは確かに信頼を置くことができるものであり、神のみことばは私たちに十分なものであるということです。この著者は私たちに確かな希望があることを教えてくれるのです。彼の希望が強められていったのは、彼の希望が確かな確信のゆえに太い綱へと変わっていったのは、彼が神のみことばの性質をしっかりと思い起こしたからです。それを確かに理解したからです。

この第12詩文節、「ラメド」というアルファベットの文字で始まる89節から96節のまでの詩文節は、大きく二つに区分することができます。一つは89節、もう一つは93節の、そこから始まる4節ごとが、この8節の中で大きな区分を作っています。それら二つの文節は二つの同じ単語で始まります。そのことばは日本語では「永遠に」とか「常に」と訳すことができることばです。この後もう少し詳しく説明しますが、そのことばを使うことによって著者は、最初のところで神のことばがいかに確かであるのかを私たちに示し、最後の4節で、神のことばがいかに私たちの必要を十分に満たすものであるか、十分なものであるかということを見せてくれています。これら二つを合わせてこの著者は、私たちがどのような人生の状況に置かれていたとしても、神の前に持つことができる希望を捨てる必要がないこと、どんな絶望の中にあっても希望を持って生きていくことができることを私たちに教えてくれるのです。

こうして私たちの道が別れるに当たって、ある意味ふさわしい箇所ではないかと私は思います。私たちの人生にはいろんな困難が待っています。いろんな問題が起こります。いろんなチャレンジが私たち

を襲います。けれども、私たちはどんな状況の中にあっても、神のみことばが私たちが経験するあらゆる事柄の中にあって信頼の置けるものであり、それら乗り越えていくために十分であることを知ることができるのです。それゆえに、揺るぐことのない希望、確かな希望を持つことができるのです。

著者が言うことばに耳を傾けてみましょう。彼はこのように言います。

### 詩篇 119 篇 89—96 節

119:89 主よ。あなたのことばは、とこしえから、天において定まっています。

:90 あなたの真実は代々に至ります。あなたが地を据えたので、地は堅く立っています。

:91 それらはきょうも、あなたの定めにしたがって堅く立っています。すべては、あなたのしもべだからです。

:92 もしあなたのみおしえが私の喜びでなかったら、私は自分の悩みの中で滅んでいでしょう。

:93 私はあなたの戒めを決して忘れません。それによって、あなたは私を生かしてくださったからです。

:94 私はあなたのもの。どうか私をお救いください。私は、あなたの戒めを、求めています。

:95 悪者どもは、私を滅ぼそうと、私を待ち伏せています。しかし私はあなたのさとしを聞き取ります。

:96 私は、すべての全きものにも、終わりのあることを見ました。しかし、あなたの仰せは、すばらしく広いのです。

深い絶望の淵にあった著者は、その絶望を乗り越えるために必死に神のみことばにしがみつきました。先週、88節で私たちはその姿を見たのですが、89節にあって、彼が初めに使うことばは実は「永遠に」ということばです。89節で「とこしえから」と訳されているこのことばが、89節の先頭で使われています。「常に」、「永久に」、「とこしえに」と、彼はそのことばを強調します。そして、そのことばを使うことによって、彼はこの89節でも93節でも、継続性、揺るぎなさ、そのことを言い表わそうとしているのです。神のみことばに希望を見出すことができる、彼はそのことを何よりも思っていました。それが強められていくに当たって、彼にとって必要だったのは、このみことばが信頼の置ける揺るぐことのないものであるという確信だったのです。様々な問題の中で彼がその確信を持つために、彼は必要なことに思いを巡らしました。そして、みことばが確かなものであると信頼を置くことができるということに強い確信を持っていくのです。私たちが希望に満ちて、喜びに満ちた生涯を歩んでいくために必要なのはこの確かな希望でした。そして、著者は私たちにそれを私たちが持つ姿を書き記してくれたのです。

### ☆神のことばと確かな希望

—絶望の中から希望へと這い上がっていくために必要なこと、神のみことばが確かな希望である証拠—

#### 1. 神のみことばの信頼性 89—92 節

最初の4節で、著者は私たちにみことばが確かなもので、信頼を置くことができるものだという事を三つの方法をもって言い表わしています。私たちの持っている希望が確かなのは、神のみことばが信頼できるからです。私たちの希望が確かなのは、神のみことばに私たちが信頼を置くことができるからです。それを説明するために、言い表わすために彼は最初に「信頼を置ける」ということを説明します。その次に、「信頼を置ける」ということを例を上げて示してくれます。例証を出すのです。そして、最後に、「信頼を置ける」ということを彼は自分自身の生涯に適用するのです。最初の4節を簡単に分けるなら、(1)説明、(2)例証、そして、(3)適用になります。

#### 1) 信頼性の説明 89—90 a 節

89—90 a 節「主よ。あなたのことばは、とこしえから、天において定まっています。:90 あなたの真実は代々に至ります。」、私たちはもうすでに、この著者が持っていた状況を考えました。何度もそのことを見て来ました。彼の周りには敵がいた訳です。その敵は単にボーと立っているだけの敵ではなく、積極的に彼を陥れようと攻撃を仕掛けていました。ありとあらゆる所に罠を仕掛け、穴を掘り、今にも彼がそこに落ちるのを待っていました。単に待っているだけでなく、ときに、彼らは彼を突き落とそうとしていたのです。そこにはいろいろな困難がありました。彼のいのちが狙われていました、彼の地位が脅かされていました。そのようなことが正直にこの詩篇の中にはもう何度も記されて来ました。

そのような状況の中で、この著者はどこを見ても希望がない、助けがないように感じていたのです。私たちがそのようなことがあります。今まで確かだと思っていたことが、信頼が置けなくなってしまうのです。なぜなら、余りにも問題が大きすぎるからです。これをしておけば大丈夫だと思っていたことが不安になります。なぜなら、上手いかなくなってしまふからです。その時に私たちににとって一番必要なものは何か信頼が置くことができるのです。これをしていけば間違いない、ここには確かさがあると、

そのように信じ切ることができる、その何かが必要なのです。そして、著者はこの神のみことばにそれを見つけるのです。

### (1) とこしえから定まっているから

著者は私たちに教えます。神のみことばに信頼を置く必要がある、それを知らなければいけない、それができると。だから、彼は言います。「とこしえから、主よ、あなたのことばは、天において定まっています。」と。ここで「定まっている」と訳されていることばは「堅く立つ」と訳することができます。「揺るぐことがない」ということができるでしょう。しかも、動詞が使われていますが、この動詞の文法の形を見ると継続性を表わしています。つまり、「永遠に、常に、決して、絶えることなく、継続的に、あなたのみことばは堅く立つものだ。」ということです。「定まっている、決して、変わることがない。」と言うのです。この地上でどんな事が起ころうとも、どのような問題が起こったとしても、あなたのみことばは天にあって確実に決して揺るぐことなく定まっていると言うのです。

私たちの生きているこの社会、世界はいろいろなことが変わっていきませんか？ふと考えただけでも周りを見回しただけでも、私たちの周りで起こっていることの多くは10年前、20年前、50年前、100年前には考えられないことです。道徳的な概念を考えてみてください。今この日本の社会の中で起こっている様々な道徳的な問題を見た時に、私たちはそれらが一般的に受け入れられることが信じられないような時代を今まで生きて来たのです。どうしてそんなことができるのですか？と思うようなことが今起こっています。なぜなら、道徳的な概念が変わって来ているからです。何が正しいのか、何が間違っているのか、その基準がどんどん変わっていきます。そのような社会に私たちは生きている訳です。私たちの生活のスタイルも変わっていくのです。そのような移りゆく影のある社会にあって、この世界にあって著者が言うことは、神のみことばは決して変わることがないということです。ありとあらゆる事柄を超えた完全に定められたあらゆることを測る秤である、それが神のみことばだと言うのです。

著者はもう何度もこのことに触れて来ました。他の箇所でもそのことを教えています。

**詩篇 119 : 152** = 「私は昔から、あなたのあかしで知っています。あなたはとこしえからこれを定めておられることを。」

**119 : 160** = 「みことばのすべてはまことです。あなたの義のさばきはことごとく、とこしえに至ります。」

**イザヤ 40 : 8** = 「草は枯れ、花はしぼむ。だが、私たちの神のことばは永遠に立つ。」

**I ペテロ 1 : 23** = 「あなたがたが新しく生まれたのは、朽ちる種からではなく、朽ちない種からであり、生ける、いつまでも変わるものがない、神のことばによるのです。」

**マタイ 24 : 35** = 「この天地は滅び去ります。しかし、わたしのことばは決して滅びることがありません。」

**マタイ 5 : 18** = 「まことに、あなたがたに告げます。天地が滅びうせない限り、律法の中の一点一画でも決してすたれることはありません。全部が成就されます。」

神のみことばとは北極星のようなものです。まだ様々な機器が発達していない時代に航海をする時に船乗りたちはどのようにして方角を定めましたか？真っ暗闇で方角が全く分からない時に彼らは北極星を探したのです。なぜですか？動かないからです。それを見ていれば、そこに向かって進んで行けば、北に向かっていくことが分かるからです。このみことばは私たちににとっての北極星なのです。移り変わっていく様々な事柄の中にあつて、この世のいろんな出来事の中にあつて、神のみことばに目を向けている時に、私たちは正しい所に確かに向かっていくことができると言うのです。それを彼は自分自身に思い起こさせたのです。

### (2) みことばが語る神が真実な方だから

でも、なぜ、神のみことばはそのように確かなのでしょうか？なぜ、それが揺るぐことがないものなのでしょう？その理由を著者は90節で「あなたの真実は代々に至ります。」と言っています。神のみことばが信頼の置ける揺るぐものがないものである理由は、このみことばを語っている神が真実な方だから、神が揺るぐことがない方だから、神が偽ることのない方だから、神が約束を必ず成就される誠実で真実な方であるからです。私たちは神に完全に信頼することが出来るのと同じように、このみことばに信頼を持つことができると言うのです。

皆さん、覚えていますか？エレミヤがその生涯の後半に、自分の愛する都エルサレムが崩壊する姿を見ました。愛するイスラエルの民はバビロンへと引かれていったのです。ほんのわずかな人たちといっしょに残されて、エルサレムを見ながら彼は嘆きの歌を書きました。「哀歌」です。その哀歌は悲しみに満ちた歌ですが、でも、その中心、彼が一番焦点を当てて強調している部分に何が書かれているのか

覚えていますか？哀歌 3 : 21 - 24 「私はこれを思い返す。それゆえ、私は待ち望む。:22 私たちが滅びうせなかつたのは、主の恵みによる。主のあわれみは尽きないからだ。:23 それは朝ごとに新しい。「あなたの真実は力強い。:24 主こそ、私の受ける分です。」と私のたましいは言う。それゆえ、私は主を待ち望む。」、エレミヤはこの詩篇の著者が言っていることと同じことをしたのです。神の真実さ、誠実さ、神が偽ることのない方であると思ひ起こしたゆえに、どうしようもない絶望の中で、愛する都が滅ばされ、人々が捕囚へと引かれていく中で、でも、神の真実はまことだ、確かだ、それは私にすばらしい希望を備えてくれると、だから、彼は「私は待ち望む。」と言うのです。神が期待を裏切らない、約束を破らない方であることを知っているから、私はどんな時でも神を待ち望むと言うのです。

この90節で、著者は「代々に至ります。」ということばを使っているのですが、実は、原文を見ると「世代から世代へ」と訳すことができます。「どの世代においても」ということです。あなたの真実はどの世代においても変わることがありませんと、再び、継続性が表わされています。神はアブラハムに対してもモーセに対してもダビデに対しても、使徒たちに対しても、そして、今を生きる私たちに対しても、同じように真実な方なのです。もし、神がアブラハムに対して約束をして「わたしはあなたを守る」と言われたなら、その約束された神は、同じ神の民である私たちに対しても「あなたを守る」と言うてくださるのです。その約束が破られることはないのです。

だから、私たちは神のみことばに信頼をすることができるのです。なぜなら、このみことばは神が語ったことばだからです。神が真実な方であれば、このみことばが言うことも真実なのです。私たちはそれに依存することができるのです。それにすがることができるのです。それに信頼を置くことができるのです。神が真実な方だからこのみことばも真実なものなのです。

説明をしてくれました。著者はその後、具体的な例えを上げて、いかにみことばが信頼の置けるものかを教えてくれます。

## 2) 信頼性の例証：神の被造物を通して 90b—91節

90b—91節「あなたが地を据えたので、地は堅く立っています。:91 それらはきょうも、あなたの定めにしたがって堅く立っています。すべては、あなたのしもべだからです。」、著者は「神のみことばの信頼性は被造物を見たときによく分かる」と言うのです。「周りを見てごらん下さい。『あなたが地を据えたので、地は堅く立っています。』」と彼は言います。神は神のみことばによってこの世界を据えられました。そのことが聖書のいろんな箇所に記載されていますが、詩篇 33 篇 6 節には「主のことばによって、天は造られた。天の万象もすべて、御口のいぶきによって。」とあります。神がそれを造っただけでなく、同じ9節には「まことに、主が仰せられると、そのようになり、主が命じられると、それは堅く立つ。」と言って、神は単にすべてを創造しただけでなく、今もそれが同じように続くように維持されていると言うのです。「堅く立つ。」のです。そして、「それらはきょうも、あなたの定めにしたがって堅く立っています。」と著者は加えています。「それら」とはありとあらゆる被造物のことを指します。あらゆる被造物は神が定められたように、神に従って同じことを繰り返し続けるのです。

皆さん、毎朝、太陽が昇りますね。毎晩、太陽は沈みますね。私たちが何かを持っていて手を離すとどうなりますか？必ず物は下に向かって落ちます。この地上に存在するあらゆるものは、今日に至るまで神が定められたことの通りに動いていると言うのです。皆さん、夜寝る時に心配して眠れなくなったことがあるだろうと思います。なかなか寝付けない日があったと思います。でも、皆さんは絶対に、明日太陽が昇るかなと思って不安になって眠れなかったことはないだろうと思います。それはどれほど馬鹿らしいことかを皆さんはよくご存じです。明日雨になるかなと不安になることはあります。でも、「太陽が昇らなかつたらどうしよう？」と言って恐れおののくことはありません。なぜですか？太陽は必ず昇るからです。それを疑う人がいますか？たとえ、私がここで「これは神がおっしゃることです。明日の朝には太陽が昇りません。」と言っても、皆さんは私の言うことを絶対に信じません。なぜなら、皆さんは太陽が明日の朝昇ることを知っているからです。

では、どうして同じように神のみことばがどんな時にも私たちに真実を告げていることを、私たちは信頼することができないのでしょうか？詩篇の著者が言わんとしていることは、非常にはっきりしています。もし、太陽が明日の朝も昇るとはっきり思っているのなら、それを信頼して疑うことがないなら、どうして同じみことばによって語られ、それを保っているこの神の約束にあなたは信頼を置くことができないのでしょうか？太陽が昇ることを信頼している皆さんは、この世が皆さんに「もう希望はありませんよ」と訴える時に、様々な問題が皆さんの心を暗くする時に、様々な悲しみによって心が落ち込んでしまう時に、どうしてそれが嘘だと言わないのですか？神のみことばはそれ程確かではないのですか？

神が造られたすべてのものが信頼を置くことができるように、神のみことばは信頼を置くことができると言うのです。これがこの著者がここで私たちに教えてくれていることです。それを彼は思い出したのです。

事実、彼はさらにこう言います。「すべては、あなたのしもべだからです。」と。これまで存在したあらゆるもの、今存在するあらゆるもの、これから未来において存在するあらゆるものは、すべて例外なく「神のしもべ」だと言うのです。生きているものも生きていないものも、私たち人間も含めて、すべては神のみことばのままに、神が言われることを忠実に全うする奴隷だと言うのです。神は完全な主権者だから、雨が降り、太陽が照りつけるのは神がそれを命じたからです。この地が揺れるのは神がそれを定めたからです。私たちの生涯に大きな事故や様々な不幸が襲いかかるのは、神がそれを良しとしたからです。私たちの周りで敵が私たちをあざ笑うのは、神がそうすることを許可したからです。すべては神のしもべなのです、彼らは単に神が定められたことを忠実に全うしているだけだと言うのです。その真理というのは、この世が造られたその初めから一切変わっていないのです。そのことをしっかりと私たちが理解した時に、詩篇の著者と同じような適用を私たちは自分の人生にすることができます。

### 3) 信頼性の適用：みことばに喜びをもつ 92節

彼は自分自身の適用を教えてください。彼はこのように言います。92節「もしあなたのみおしえが私の喜びでなかったら、私は自分の悩みの中で滅んでいでしょう。」と。89節から91節にかけて、彼は具体的な形で思い出したことを記しています。神のみことばは信頼することができる、なぜなら、私の神は真実な方だから、事実、この地上に造られたありとあらゆる事柄を見たら、神を信頼することができると思っただけだと言うのです。ヘブル11:3にこのように記されている通りです。「信仰によって、私たちは、この世界が神の**ことば**で造られたことを悟り、したがって、見えるものが目に見えるものからできたのではないことを悟るのです。」

そして、彼は言います。「もしあなたのみおしえが私の喜びでなかったら、私は自分の悩みの中で滅んでいでしょう。」と。自分が今滅んでいないのは、私が神のみことばに喜びを持っていたからだと言っているのです。彼はこの「喜び」ということばをこれまでも何度も使って来ました。実は、この「喜び」ということばは複数形が使われています。ありとあらゆる喜びを合わせたような喜びだと言うのです。すばらしい大きな喜び、これ以上ない喜びです。このことばは、

24節「まことに、あなたのさとしは私の喜び、私の相談相手です。」

77節「…、あなたのみおしえが私の喜びだからです。」

143節「…、しかしあなたの仰せは、私の喜びです。」

174節「私はあなたの救いを慕っています。主よ。あなたのみおしえは私の喜びです。」

と、これらすべての箇所において、どんな苦しい困難な状況の中にあっても「私はみことばを喜びとしています」という意味合いで使われています。どんな中にあっても喜ぶことができる、喜ぶべきだと知っているということです。彼が滅びないこと、敵からの攻撃によっても、様々な問題によっても、押しつぶされてしまうことがないように希望を持ち続けることができるそのすべは、みことばにあることを彼は知っているゆえに、彼はそのみことばを見て喜ぶのです。「良かった」と思うのです。あらゆるものが奪い去られたかもしれないけれども、私はこのみことばを持っていると言うのです。私はここに喜びがある、このみことばを通して知ることができる神を私は見ることができると。

神のみことばは信頼を置くことができるものです。神のみことばは揺るぐことがない、頼ることができるものです。太陽が毎朝昇るのと同じように、このみことばは常に私たちに真実を伝え続けてくれます。ありとあらゆるものは神の支配のうちにあり、たとえ、敵であったとしても神の赦しがなければ彼を傷つけることすらできないのです。たとえ、どれほど人生の状況が悪いものであったとしても、この詩篇の著者は神の真実さ誠実に、神が約束を破ることのないすばらしい方であることに気付いたので、それを教えてくれているみことばを持っていることに目を向けた時に、彼の心は喜びで満たされるのです。なぜ、滅びないのですか？このみことばが喜びだからです。たとえ、敵が私たちを傷つけ、たとえ、問題が私たちの心を決ったとしても「みことばがある限り大丈夫だ」と、彼はそのように言っているのです。皆さん、皆さんは人生の様々な問題の中で希望を持っておられますか？皆さんの人生が皆さんに問題を投げつける時、皆さんの敵が皆さんを壁際まで追いつめる時、皆さんが死の陰の谷を歩まなければならない時に、皆さんは神のみことばを通して与えられている約束に目を向けるがゆえに、希望を持って前に進んでいますか？このみことばが私たちに示すことが真実であるゆえに、皆さんもこのみことばを何よりの喜びとしていますか？

マルチン・ルター、皆さんご存じですね。偉大な宗教改革者です。彼はこの119篇92節のみことばを自分の聖書の最初のページに、自らの手で書き込んだと言われています。実際に、その聖書が今も、ドイツの博物館に飾られています。彼がこのことばを自分の聖書に記したのは、彼が死ぬ4年ほど前だったと言われています。あらゆる困難を通り抜け、彼の周りには敵がたくさんいました。多くの人たちが彼のいのちを狙いました。彼が語ったことばの信頼を失わせようと多くの人たちが努力しました。彼の前には多くの攻撃があり続けたのです。その中であって、その人生の終わりに、彼はこのみことばを記したのです。「もしあなたのみおしえが私の喜びでなかったら、私は自分の悩みの中で滅んでいたでしょう。」と、彼はそのことをよく分かっていたのでしょうか。そのことを経験して来て、でも、聖書が教えることが正しいことを彼も分かったから、この詩篇の著者と同じように「神さま、感謝します」と言ったのです。「私が滅びないのはあなたのみおしえが私の喜びだから。」と、私たちも同じようにしないといけないのです。神のみことばは信頼の置けるものです、揺るぐことのない真実なものであるゆえに、私たちは変わることなく、このみことばに喜びを見出していなければいけないのです。

## 2. 神のみことばの十分さ 93-96節

でも、それだけではありません。この著者はもう一つ、私たちに教えてくれます。私たちの希望が確かなのは、神のみことばが信頼を置くことができるだけでなく、神のみことばが私たちのすべての必要に十分だと言うのです。そのことを彼は93節から96節で教えています。ここでも著者は先ほど言った「とこしえに、永遠に」ということばを冒頭に使います。日本語の訳ではこのことばは出て来ません。直訳するとこのようになります。「永遠に、常に、とこしえに、私はあなたの戒めを忘れません。」と。「決して」とここでは訳されています。絶対に忘れることがないからという意味です。でも、強調していることは「永遠に、どんなことがあっても決して忘れることはない。常に私はこのことを覚えています。」ということです。多分、詩篇の著者はここでこのように思っていたのでしょうか。ちょうど、神のみことばが天において変わることなく永遠に定まっているのと同じように、そして、その影響が被造物にはっきりと現わされているのを見て取ることができるように、私の心の中で、私の生涯のうちにあって同じように、とこしえに永遠に変わることなく常に神のみことばがしっかりと定められるように、「決して忘れません！」と言うのです。

どのようにしてそのことができるのでしょうか？そのことを言い表わそうと、彼は二つの事柄を上げています。神のみことばが十分だということを彼は私たちに思い知らせてくれるのです。自分自身の心にそれを思い浮かべ、それをしっかりと刻もうとするのです。最初に彼が言うことは、神のみことばは私たちの問題の中にあって十分な力を備える、力を与えるということです。そして、二番目に、私たちの必要の中にあって神のみことばは私たちに十分な知恵を与えると云います。力と知恵です。

### 1) みことばは私たちに十分な力を与える 93-94節

93節「私はあなたの戒めを決して忘れません。それによって、あなたは私を生かしてくださったからです。」、彼が「決して忘れない、永遠に覚え続けています。」と言ったのは、神のみことばが彼を生かすことを知っていたからです。彼は88節で祈っていました。「あなたの恵みによって、私を生かしてください。」と。彼は「みことばによってあなたは私を生かしてくださった。」と云います。この93節のことばはある意味で92節のことばを言い換えただけかもしれませんが。神のみことばが常に信頼を置くことができる、変わることはないものであることを知ったがゆえに、それを理解したゆえに、この詩篇の著者は様々な問題に立ち向かう勇気と力をみことばを通して得たのです。それがこの著者に起こったことでした。この詩篇を見る限り、特に、この後出て来る95節を見た時に、私たちがはっきり分かるのは、著者の状況が変わった訳ではないということです。彼はまだ困難な中にいるのです。彼の周りにはまだ同じように敵がいるのです。その敵は彼の周りで穴を掘り、罠を仕掛け、彼を陥れようと積極的に努めているのです。外面的な状況は一切変わっていません。でも、変わったことがあるのです。彼の内側が変わったのです。彼の内側に力があるのです。神のみことばが彼の心に働きかけ、彼のうちに新しい希望をもたらしたのです。彼の心に平安を備えたのです。それこそがまさに神のみことばのわざです。神のみことばはそのようにこの著者にしたし、同じように、皆さんにもすることができるようです。皆さんが傷つき、打ちひしがれる時に、神のみことばを見てください。皆さんは、神が皆さんを気遣っていること、皆さんにケアをしようとしていることを見出すことができます。皆さんが孤独で恐れを抱いている時に、このみことばを見てください。そこに皆さんは神が皆さんとともにいて、決して、皆さんを見捨てない、皆さんの元を離れないという約束を見出します。皆さんが弱っている時に、このみことばを見てください。皆さんは神が皆さんを力づけるその約束を見ることができるようです。

パウロはこのように言いました。ローマ 8 : 38 - 39 「私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、:39 高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」と。皆さん、今お読みしたみことばは信頼の置けるものですか？置けます。今見て来た通りです。太陽が昇るのと同じように、キリストの愛、神の愛は、私たちを神から引き離すことができないものだというみことばは確かなことばです。信頼を持ったなら、本当に信頼しているなら勇気が出ませんか？力が与えられませんか？それが必ず起こるのを知っているから、どんな孤独の中にあつたとしても、どんなに傷ついている中であつたとしても、神はそこにいて私たちに愛の手を差し伸べてくださっているのを、私たちは確かに知ることができるからです。どれ程大きな苦しみも大きな試練も、どんな迫害であつたとしても、私たちの神が私たちに与えてくれる十分な力は、私たちの弱さのうちに働いて、神がみことばを通して成し遂げてくれる約束に信頼をもたらすことができるのです。希望を持ち続けることができるのです。沈み続けている必要はないのです。

だから、著者は 9 4 節で言います。「私はあなたのもの。どうか私をお救いください。私は、あなたの戒めを、求めています。」と、切実な助けが要求されています。「助けてください、救ってください、この困難な状況から私を救い出してください！」と。なぜ、そんなことを願ったのですか？その根拠はここにありました。「私はあなたのものです。私はあなたに属しています。」と言います。最初に、神を信頼して生きていくことができるそのいのちを与えてくださったこともそうだし、その後、様々な状況の中で神が私たちに活力を与え続けてくださることも、それらが証明することは、私たちが神のものであるということです。だから「私はあなたのものです。あなたに属しています。」と言うのです。それだけではありません。彼は最後にこのように言います。「私は、あなたの戒めを、求めています。」と、新しいいのちが与えられ、神を信頼して生きていくことを学んでいったゆえに、彼はその人生を賭けて神の戒めを守って生きていこうとするのです。主に似た者になりたいという希望を持ち続ける者は、神の戒めを守って生きようとする者ではないですか？この二つは彼に「神は私を助けてくださる」というはっきりとした根拠を与えます。なぜなら、この方は見捨てないし手放すことをしない方だからです。

この箇所を学んでいて私は、私も皆さんも大好きなイザヤ書 40 章 3 1 節のみことばを思い出しました。イザヤはその直前で「:28 あなたは知らないのか。聞いていないのか。主は永遠の神、地の果てまで創造された方。疲れることなく、たゆむことなく、その英知は測り知れない。:29 疲れた者には力を与え、精力のない者には活気をつける。:30 若者も疲れ、たゆみ、若い男もつまずき倒れる。」と言います。神がどのような方かを知っているゆえに、3 1 節「しかし、主を待ち望む者は新しく力を得、鷲のように翼をかって上ることができる。走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ。」と言うのです。どのような困難の極限にあつても、どのような絶望の谷底にいたとしても、神がどんな方であるのかという信頼を失わない人、神のみことばが言っていることは正しいと信じ切る人は、鷲のように翼を駆るのです。ジタバタと喘ぐのではないのです。信仰という翼を大きく広げて、神の恵みの力によって天空へと一気に舞い上がっていくのです。「走ってもたゆまず、歩いても疲れぬ。」と言います。

与えられる救いは必ずしも困難からの脱出ではないかもしれません。私たちの人生の様々な問題からの解放でもないかもしれません。ときに、神からの助けは困難の中にある勇気であるかもしれません。神からの助けはときに受け入れ難いような状況の中にある喜びかも知れません。極限の不安の中にある平安かも知れないし、考えもしなかったような不幸の中にある感謝かも知れません。でも、主を待ち望む者、主に信頼し神のみことばに信頼する者は、必ず、立ち上がって死の陰の谷を勇気をもって主とともに歩み続けるのです。なぜなら、神のみことばは十分な力を私たちに備えてくれるからです。

## 2) みことばは私たちに十分な知恵を与える 95 - 96 節

95 節「悪者どもは、私を滅ぼそうと、私を待ち伏せています。」と、やはり状況は変わっていません。今でも敵は積極的に滅ぼそうと考えて私を待ち伏せていると言うのです。でも、そのような中であつて、彼は神のみことばがもたらす希望に自分自身をしっかりと結びつけたのです。人生はいまだに困難でした。敵が彼を滅ぼすために熱心に待ち受けていたのです。けれども、彼の心は変えられていたのです。彼は言います。「しかし私はあなたのさとしを聞き取ります。」(95 節)と、私たちがいろいろな問題を抱える時に、私たちが先ず初めにすることは、その問題に対して瞬間的に反応すること、応答することです。難しいことがありましたと頭を抱えるのです。いやなことがありましたと悲しむのです。落胆するのです。これは瞬間的な応答ではないですか？このような問題があつた時に私はこう考えるとすぐに応答するのです。ところが、この著者がすることは「敵が私を滅ぼそうと待ち伏せています。でも、

…」、この前の詩文節では彼は失望しましたが、神のみことばのすばらしさを思い起こし、そこにある力を見た時に彼は「しかし私はあなたのさとしを聞き取ります。」と言ったのです。「聞き取る」と訳されていることばは「熱心に考える」と訳することができます。彼は自分の思いの中で瞬間的に応答することを止めたのです。どんな問題が起こったとしても、私はこのみことばを熱心に思う、そこからあなたが与えてくださる正しい解答に目を向けて、それを実践していこうと私は生きていくと言うのです。

だから、彼は言います。96節「私は、すべての全きものにも、終わりのあることを見ました。しかし、あなたの仰せは、すばらしく広いのです。」と、読んだだけでは何を言っているのかよく分かりませんが、こういうことです。この地上にあるどんなものでも、それがたとえどれ程完全に見えても、欠けたところがないと見えても、それらはすべて足りないところがあると言うのです。唯一完全なもの、唯一欠けたところのないものは神の仰せだけだということです。彼には敵がいました。彼の前に様々な罠を仕掛け、もうここから逃れることができないかのように思い込ませました。彼らの計画は完全だったのです。少なくとも、著者にはそう見えたでしょう。だから、どうしたらいいのですか？と嘆いたのです。でも、神のみことばに耳を傾け思い巡らしていく時に彼は気付いたのです。たとえ、彼の敵がどれほど完全な罠を仕掛けたとしても、神はそこから私を救い出すことができると。

私たちが持つどのような困難であっても、ここから逃れることが絶対にできないと思わせる絶望の中にあつたとしても、私たちは神のみことばを見る時に、神はその中から私たちに希望を与え、私たちが主を喜び感謝しながら生きていけると気付くことができます。地上において起こるありとあらゆることがどれほど完全に見えたとしても、その遥か先にもっと完全な神がいるのです。その神のみことばに耳を傾け、その神のみことばを熱心に思い、私たちがそこに信頼を置いて生きていこうとする時に、私たちは確かに主の知恵によって問題の解決を見ていくようになるのです。

パウロは言いませんでしたか？神のみことばは私たちの生涯に十分であると。Ⅱテモテ3章でパウロはテモテに対してこのように書き記しました。16-17節「聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。:17 それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。」と。何一つ欠けたところのない十分なものに変えることができると言うのです。なぜですか？みことばが有益だからです。私たちに何が正しいのかを教え、私たちが間違っている時に私たちを戒め、間違った道から正しい道へと変わることができるように矯正し、その正しい道を歩み続けることができるように訓練するみことばは、私たちがどのような経験をしようとも、どのような問題を抱えようとも、すべての事柄にふさわしい十分に整えられた者となることができるように私たちを変えようと言うのです。

皆さん、神のみことばは私たちに十分な力を備えてくれます。神のみことばは私たちに十分な知恵を与えてくれます。もう進むことができないと思うその困難の中で、神はみことばを通して力を与えてくれて、私たちに勇気を備え私たちを前進させてくれます。もうどうしようもないという絶望の中で、このみことばは私たちに知恵を与えてくれ、信仰の目をしっかりと見開いて神の希望に目を向けることができるようにしてくれるのです。だから、私たちは確かな希望を持てるのです。揺るぐことのない、絶対に信頼を置くことができるみことば、どんな状況の中でも私たちを前へと進め続けてくれるすばらしい力と知恵を備える十分なみことばが私たちに与えられているゆえに、私たちは確かな希望を持って毎日の生活を生きていくことができるのです。

皆さん、みことばを信頼していますか？皆さんはこのみことばに心からの信頼を持っていますか？たとえ、どれ程大きな絶望の淵に置かれたとしても、詩篇の著者は希望を失うことを拒みませんでした。なぜなら、彼は神のみことばに希望があることを知っていたからです。そして、その希望にしがみつきました。「私はそれを信じる」と言ったのです。そして、なぜ信じるべきなのかという理由をしっかりと自分の心に思い起こさせたのです。その時に彼は、96節を終わるに当たって、希望である神のみことばというしっかりとした土台の上に確かに立って、前に向かって進んで行こうとするのです。それがこの詩篇の著者に起こったことであり、それが私たちの人生に起こることでもあるのです。

私は一人の人物がまさにこのことをつい最近、いや、今もしているのを知っています。彼はこの数週間、私の心に非常に大きな働きをなし続けています。彼の名前はブライアンと言いますが、私の神学校時代の親友です。彼は3週間程前、非常に大きな自動車事故に遭いました。車の写真を見たのですが、運転席がありませんでした。完全に車は破壊されました。彼は病院へと緊急搬送され、そこで彼を見た医師たちは頭蓋骨が折れていることを確認し、両腕の骨がバラバラになり、そのうちの骨のいくつかは、見つけることができなかつたのです。彼の頸椎はぐしゃぐしゃにされていました。10日間のうちに彼



は9回の手術を受けて、何とかその壊れた体を元に戻そうという努力がなされました。私は3月に渡米した時に彼に会いました。そこでいろんな話をしました。彼は5年ほど前に開拓伝道を始め、彼の生まれ育った地で教会を建てました。5年経って、ようやく教会に集まる人たちが50人を超えるようになり、彼は非常な喜びをもってその話を私にしてくれました。「今、非常に良い時なのだ」と。また、彼は非常に語学に堪能な人物なので、近くの神学校でヘブライ語やギリシャ語を教え、また、神学を教えていました。そこで教えることの喜びを実感し、多くの後継者を育てることに喜びを見出していました。まさに、彼の人生は神に用いられるすばらしい状況の中にあつたのです。けれども、彼のその順調な歩みはある雨の晩、家に向かっていく途上で粉々に裂けました。あわれみ深く常に最善をなして下さるすばらしい神は彼のいのちを助けてくださいました。医師たちも驚くほどの回復が今も与えられています。不思議なことに、このような大きな事故に遭ったにも関わらず、彼には一切麻痺が見られません。神のすばらしい御手がそこにあつたのでしょう。

先週の日曜日、彼は病室からインターネットを通して教会に向けてメッセージをしました。彼はそこでこのようなことを言うのです。「今、私は病院の病室にいます。回復が非常に早くて喜んでいますが、でも、たとえ、回復していなかったとしても神はそのことにおいても主権者です。神は良い方だから、たとえ、悪に見える事柄であっても、たとえ、いやな事柄であつたとしても、究極的には神が分かちおられる、神が計画しておられる良いわざをなすために神が用いてくださっていることを私は分かちています。私の生涯において、神ご自身が計画していることを成し遂げようと今してくれています。この苦しみを通してもそれをしてきています。私はそれを心から受け入れます。そして、神が私を通して、いや、この出来事を通して、私に何を教えてくださろうとしているのかを知りたくてワクワクしています。」と。私もそのメッセージを聞きました。彼は苦しみの中にあります。でも、彼は喜んでいます。彼の未来は全く不透明です。これから何が起るのか彼には分かりません。でも、彼は希望に満ちています。彼の生涯はいのちさえ危ないような状態でした。けれども、彼は今も続けて神への感謝を一度たりとも忘れることがありません。

私たちは現実を見なければいけません。私たちは本当に自分の周りにあるありとあらゆるものを取り去られたとしても、神に対する希望を失わずに生き続けることができるでしょうか？私たちの健康が、私たちの財産が、私たちの家族が、私たちの働きが、私たちの未来が、私たちが大切だ重要だと思っているありとあらゆる事柄が私たちから取り除かれる時に、私たちは神のみことばが信頼できるものであり、そのような試練の中にあつても十分なものであるということを知っているゆえに、確かな希望を持って生き続けることができるでしょうか？詩篇の著者はそうしました。私の友人は今それをしてくれています。私もそれをしてほしいし、私は皆さんにもそうやって生きていていただきたいと心から願います。

神を知ってください。神のみことばを知ってください。神を信頼してください。そのみことばに揺るぐことのない信頼を置いてください！神と神のみことばにしか見出すことができない唯一の祝福に満ちた希望を、皆さんが決して手放すことがないように。なぜなら、それは神に属する皆さんのものだからです。そのようにして皆さんが天に行くその日まで、主を見つめつつまっすぐにしっかりと歩んでいくことを心から祈り願っています。